

?と!が生まれる 自然環境

小さな自然に子どもたちの目が向くようにするためには、保育者のどんな働きかけが必要でしょうか。

監修＝大澤 力(東京家政大学教授)

自然を取り込む園庭作り vol.6

園内外の環境をつなぐ

執筆＝内野彰裕(東京都・東京ゆりかご幼稚園園長)

園外保育に出かけると、さまざまな草花に「出会い」ますが、保育者のかかわり方によっては、その「出会い」もただの「花」で終わってしまったり、存在にさえ気づかなかったりすることもあります。

3歳児クラスは入園して間もない4月から、春の草花に会いに散歩に出かけます。道端で見かける「ヒメオドリコソウ」「カラスノエンドウ」、「スズメノテッポウ」など、名前からも想像がつく花の特徴を伝えるために、保育者は事前にペープサートを作って話をしたり、ときには踊って表現したり。そうすることで、子どもたちは期待をもって散歩に出かけていき、その草花を見つけると、じっと眺めたり、なでてみたりして「出会い」を楽しみます。

園に帰ると、園内の草地に同じ花があることを発見し、毎日あいさつをしたり、「○○草さんはいないのかな?」と探したりする姿が見られます。季節が移ろい、その草花が姿を消すと、「いなくなっちゃった」と寂しがる子も。

そして、進級した翌春、園外の同じ場所や園庭の草地で1年前のあの○○草を見つけます。子どもたちは「あの花は春になると会えるんだ!」ということを1年かけて理解することになります。

4歳児クラスでは、季節ごとに園庭草花マップを作り、実際に草や花を見つけると、子どもたちはマップに絵をかき込んでいきます。園内の隅々まで探して新たな草花を見つけると、虫眼鏡や図鑑で熱心に調べ、保育者も知らない草花を発見することもしばしば。そして、また園外のさまざまな場所に出かけることで、草花に対する興味・関心は一層広がり、深まっています。



4歳児が作った園庭の草花マップ。名前を調べ、見つけた場所に押し花(草)をはってある。



一般に雑草として扱われる草花も、子どもたちの自然への愛着心や興味・関心をはぐむ大切な環境。園庭にはできるだけ残している。

お散歩に保育者手作りのペープサートを持参。その草花の特徴などを、子どもたちにわかりやすく説明。



より親しみがもてるよう、見つけた草花の名前をグループ名に。

※このページでは、「いつでも自然とふれあえる園庭」を目指して、保護者と子どもと保育者で園庭改造に乗り出した東京ゆりかご幼稚園の実践を、1年間で紹介します。来月は「保育室から森へ～絵本の世界を広げて～」です。

気づき、観察する力

これは何？ なんか違うよ！

栽培では、生長を喜ぶだけでなく、観察する楽しさも感じてほしいもの。観察しやすい環境、気づきを促す援助には、どのようなものがあるでしょうか。

取材協力＝東京ゆりかご幼稚園（東京都）

クラス前「いろいろプランター」

当園では、園舎の2階にある5歳児クラスの前に、「いろいろプランター」と呼ばれる何を植えてもよいプランターが置いてあります。

もともとは、土のない2階でも植物の育ちを感じてほしいという思いから、香りを楽しめるハーブや、暑さを和らげるカーテンになるゴーヤやキュウリを子どもたちと植えていました。

あるとき、弁当に入っていた果物の種を園庭にまきたいという子がいて、「それならば毎日身近に観察できるクラス前のプランターにまこう！」ということになりました。以降、スイカ、ブドウ、甘夏、ザクロ、オシロイバナなど、弁当に入っていたり、園庭で見つけたり食べたりした物の種を植える子が増え、忘れたころに次々と生えてくる芽に、「何かが生えてきた！」と、プランター周辺がにぎわうようになりました。図鑑を一緒に見たりしながら、保育者も一緒になんの芽かを考えます。

自由に植えて育てられる気軽さや、日々の生活のなかで生命の育ちと循環を感じられる身近さが、「育ててみたい」という欲求を一層強いものにしていきます。

ひとつだけ違う！

畑で農作物を育てるときに、子どもたちの興味を促すアイディアとして、学年ごとにある「しかけ」を施します。

例えば、3歳児がキャベツを育てるときに、1つだけ芽キャベツを混ぜてみたり。毎日見守っていると「なんだか違う！」ということに気がつく子がいます。



さまざまな芽が出てきた「いろいろプランター」。ある程度生長したら、園庭に植え替えることも。

何の種かわからないときには特徴を書いて。



キャベツといえば、丸いまま生えてくると思っていた子どもたちに、丸くなるまでの育ちを説明。



「あの葉っぱ、なんか違うよ！」「なんでだろう？」子どもたちの気持ちが、栽培物に引き付けられる。

4歳児が花を育てるときにも、1つだけ違う色の花を混ぜてみます。一見同じように見えても、花の色だけが違うことに子どもたちは驚き、「ほかに、どこが違うんだろう？」と見比べながら観察していくことで、植物の特徴や多様性に気づききっかけになります。

3、4歳児のときにこれらの経験を積むことで、5歳児になると、さらに好奇心や探求心が膨らんで、より科学的な目で植物を観察できるようになっていきます。

思わぬ展開も利用して

2月の節分のころから、紫花豆、白花豆、黒豆、小豆、大豆、虎豆、パンダ豆など、さまざまな種類の豆に触って質感を楽しんだり、重さ比べをしたりしてきました。

ある日、5歳児が夏に行った流しそめんを思い出、「流し豆」をしたいと思います。雨どいを設置してバケツに水をくんで豆を流し、園庭に落ちている小枝をはし代わりにして、豆をつかんでいくあそびです。この不思議なあそびに3、4歳児も興味津々。大勢が群がって「大流し豆あそび」となりました。

その後数日間、たらいで受けた「流し豆」を水に浸かったままにしておいたところ、なんと、数種類の豆から芽が出てきました。子どもたちと芽を観察して楽しんでから、園庭の周囲にまいたところ、しっかりと根付き、春になりいくつかの豆がなりました。自然はときに、保育者にもうれしい驚きをプレゼントしてくれます。

※さまざまな種類の豆は、自由にふれられるよう玄関にしばらく掲示した後の、食用として適さなくなった物を使用しています。



「行くよー！」雨といの上のほうから水を流す。「流し豆」を楽しんで、それで終わりの予定だった……。



……ところが、思いがけず、水に浸かっていた豆から、芽が出てきた！

自然への「気づき」がはぐくむもの

「いろいろプランター」は、「栽培」と「観察」を組み合わせたすばらしい気づきの保育活動です。わたしは、かつて3名の5歳児と1年間、2畳分ほどのスペースでビオトープ※を作り、維持管理するという保育実践研究を行いました。いわば、いろいろプランターの拡大版です。その結果、「自立する心の育ち」「自然を大

切にする心の育ち」「科学する心の育ち」「意欲の向上」「心の癒し」といった変化が3名ともに見られたのです。身近な自然とのかかわりに基づく「気づき」は、子どもの心を確実にはぐくみます。（大澤 力）

※ビオトープ＝ギリシャ語の bios（生物）、tops（場所）に由来する。生物が生息する、まとまりをもった場のこと。